

平成 28 年度 新潟市立亀田図書館 文化講演会

「私の俳句観」

講師 若 井 新 一 氏
(俳 人)

講演会記録集

新潟市立亀田図書館

■ 平成 28 年度 新潟市立亀田図書館 文化講演会

日時 平成 28 年 11 月 23 日 (水・祝) 午後 2 時～
会場 新潟市立江南区文化会館 多目的ルーム

「私の俳句観」

講師 若井新一氏
(俳人)



目次

1	俳句との出会い・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	結社「花守」 目崎徳衛（志城 柏）先生・・・・・・・・	1
3	結社「狩」 鷹羽狩行先生・・・・・・・・・・・・・・・・	2
4	「角川俳句賞」の応募について・・・・・・・・・・・・	3
5	句集の刊行・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
6	句作のスタンス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
7	「写生」とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6
8	「花鳥諷詠」について・・・・・・・・・・・・・・・・	8
	質疑応答・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
	講師プロフィール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
	巻末資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	16

1 俳句との出会い

若井新一と申します。まず俳句との出会いの話をさせていただきます。私の俳句との巡り合いは 30 歳頃でした。学校を卒業後、村上電報電話局に奉職しました。その後父が亡くなったので、地元の電話局に帰してもらい、農業をしながら勤務していました。通勤できる範囲にしているというありがたいことですが、会社での栄達とは無縁になります。そこで無為な人生を送らないように、生涯打ち込める楽しみを探しました。最後に「俳句」に出会いました。俳句は芸術的な要素と、文学的な一面があるのですが、両面があることになぜか魅了させられました。俳句は①5・7・5の型、②一句はなるべく一つの季語で完成させる、③「や」「かな」「けり」等の切字は一句に一つまで、という三つの大きな約束事を守れば、たった十七音で一つの世界を作れます。一人でもできますし、仲間とも楽しむことができます。

地元に戻り、やるべきことを決めきれずに迷っていた頃、とある本屋さんで、「飯田龍太俳句鑑賞読本（春・夏）編、（秋・冬）編」という 2 冊の入門書を手にし、パラパラとめくってみました。今まで考えていたような宗匠的な俳句とは異なり、何とみずみずしいことかと思いました。すぐに購読し、時間の経つのも忘れて夢中になって読みました。季語が分からないと俳句にならないので、「歳時記」という存在を知り数冊購入しました。その他入門書も買い込み、次々と読みまくり、しばらくの間は句作をしませんでした。芭蕉の頃の「俳諧」から現代俳句までの歴史の流れはどんなことになっているのか、一通り概略を頭の中に入れたのです。それから「俳句」の実作を開始したのですが、作る前に書物によりいくらかの知識を得たことで五里霧中ということがなく、かなり有意義でありました。

2 結社「花守」目崎徳衛めざきとくえ（志城しじょう 柏はく）先生

俳句は一人でこつこつと学ぶことは最も大事ですが、結社に入って主宰や先輩から指導を受けることも不可欠です。俳句の結社というと、何かとても古めかしそうに聞こえましたが、その存在を知りました。昭和 54 年の春の事です。昭和 54 年に入会した「花守」は、「風」の系列誌で、新潟県の俳人を主とした結社で小千谷市に発行所がありました。主宰の目崎徳衛（志城 柏）先生は「風」の主宰をしておられた沢木欣一先生と、東京帝国大学の同級生の学者でした。西行法師の研究の権威であり、中世の王朝文化にとっても詳しい方でした。

皇室では、各天皇陛下がみまかられてから 100 年毎に、その天皇はいかなる人物であったか、学者がお聞かせするのだそうです。それをご進講というとか。ご進講のときには天皇、皇后をはじめ、皇族の方々が学者の反対側の席にずらりと並び、該当の天皇のことのお話をそろってお聞きになるのだそうです。昭和天皇、平成天皇にご進講をなされた目崎先生は、学者としてどんなに偉い人であったかが、このことだけでも分かります。

「花守」は、長岡の日本赤十字病院の結核の入院患者で、俳句好きな人々が立ち上げました。目崎先生もそこに入院しておられ、皆に乞われて主宰になられたのです。先生は俳句の方でも「風」の原始同人であり、先ほど言いました沢木先生らと一緒に同人誌「風」の一員でした。パスヤストレプトマイシンが世に出て、結核が治るようになってからも俳誌「花守」は平成9年まで、発行されました。目崎先生の選句の幅はかなり広く、会員にはいろいろな流派の人が200人ほどおりましたが、先生は公平に教えてくださいました。

「花守」では「写生」や「切字」、および、座五の「て止め」の禁止などを体得しました。「花守」の会員は競い合うところがある一方、団結心もあり充実していましたが、先生が脳梗塞で倒れてしまわれたことにより、平成9年に廃刊となってしまい、残念至極でした。その後目崎先生は平成10年の夏、永久の眠りに就かれました。余りにも偉大な学者の主宰でしたから、後継者は遂に出なかったのです。私自身は俳句も初心者ですし、結社に入るのは初めてでしたので、いろいろなことが新鮮に見えた20年間でした。得るものも沢山あり、自身の基礎はここで鍛えられて築かれました。「花守」では、俳句の作り方は「写生」を中心にして、表出はなるべく静かにすることや、第三者に理解してもらうためにも、平明な表現をすることの大切さをじっくりと学びました。

目崎先生は、雪国新潟にくすぶっていないで、三国峠を越えて関東地方に通じる実力のあつる俳人になるよう努力せよ、と折に触れ会員たちに叱咤激励されました。また俳句は短いで、運、不運というギャンブル的要素がある。そのことを承知して励むようにとの指導があり、当時の指針と致して励んだのであります。更に句作りの職人になっては駄目だ、もっと古典を勉強するようにと叱咤激励されましたが、私は会社員、農民、俳句作りと多忙を極めており、なかなかそこまで手が回らず俳句を作るのがやっとでした。したがって主宰のお言葉には答えられませんでした。

3 結社「狩」^{たかはしゆぎょう}鷹羽狩行先生

「狩」は昭和56年に入会しました。主宰は昨年芸術院会員となられた鷹羽狩行先生です。「古典を現代に生かす」ということを標榜しています。また、「今までに誰も作らない句を作ろう」、会員の作品は「百花繚乱」のごとしが望ましいとの教えもあります。鷹羽狩行先生の師匠は、高名な山口誓子と秋元不死男です。昭和の時代には男性が多かった「狩」でした。ところが35年間を経た現在の「狩」は女性が圧倒的に多く、作風も平句に季語を入れたような柔らかい句が多くなりました。堂々とした風格のある独立型の句が少なくなっています。結社「狩」のよいところは、何と申しましても句意が明瞭であり、スマートで苦吟がありません。このことは初心者にとっては敷居が低く、上達しやすい結社と言えましょう。無駄の

ないソフトな言葉を駆使して仕上げる、都会的な素材の人事詠が多くみられます。が、ある程度力が付き、形にはめてまとまりのある句を作れるようになると、会員の一人一人悩みが始まります。それは今後、作者の個性をどう伸ばすかということに尽きます。同人まで行けばその後はどうするかは自己責任になりますが、多くの同人は悩むことでしょう。所属結社の色の範囲にするか、それとも独自の作り方を求めて、新風を巻き起こすかです。新風を出せば俳句の世界の新人になり、同一色にとどまれば、他の結社から見ると痛くもかゆくもない俳句詠みの人で終わります。

さて話をちょっと変えます。「狩」も他の結社と同様に新年の俳句会があります。同人や会員は、主宰に年頭のご挨拶をさせて頂きます。例えば「明けましておめでとうございます。本年もよろしく願い申し上げます」と申し述べます。すると主宰から、「あなた、この頃句が落ちているねえ。僕を驚かせるような句をもっと見せてよ」などと、厳しいお言葉が返ってきます。そんな時は弟子のほうかにこやかに、黙って頭を垂れるばかりなのです。余計なことを申し上げますと、もっと厳しいご指導があるかも知れませんが、それを避けたいのです。

同人とは免許持ちのことを言いますが、そこまで地位が昇ると、他の人と同じようなラインの作品で甘んじますと、芸術的にはそれで十分ですが、新しさが出せません。芸術とは人真似をすることではなく、今までに誰もが出したことの無い、新しさを求めるところに価値があるのです。多少いろいろなことが生じて、新しさを希求する姿勢がないと、作者の成長はそこで止まってしまいます。

私は、昭和 60 年に「狩」の同人にさせて頂き、今日に至っています。気持ちだけでも「先人が作っていない句」を作ることを、毎日希求しています。暖め返しの風呂に入らない、常に更湯に入らなければならないという気持ちなのです。

4 「角川俳句賞」の応募について

俳句は結社の中で力をつけていくのが基本です。例えば前述の、〇〇結社同人ともなれば、努力が報われたのですから、満足する人も沢山います。それでもよいのです。人生の中で俳句的生活を、十分エンジョイすることができますから。

一方これとはまったく違う、厳しい道を選ぶこともできます。例えば、30句とか50句とか、新作で未発表の作品を作り、総合俳句誌の設定している賞に応募する方法です。これらは「プロの登竜門」です。登竜門は高い壁がありますがけれども、果敢に挑み、その結果運よく受賞することができたら、プロの俳人のスタートラインに立つことができます。現在の俳壇では、新作50句応募の「角川俳句賞」、30句応募の「俳壇賞」などがあります。「角川俳

句賞」は「俳壇の芥川賞」などとも呼ばれ、毎年一度選考があり、現在は 62 回になっています。

私もある俳人に勧められ、決断して応募を開始しました。当時は 38 歳でした。始めは何でもよいので、句を寄せ集めての応募です。ところが幸運なことに、1 回目から能村登四郎先生に推薦されて候補になったのです。ビックリしましたが、それに気を良くして毎年毎年応募するようになりました。その後は候補になったり、予選落ちをしたりしました。簡単なようでも新作 50 句を応募し続けるとなると、なかなか大変なのです。過去に一度でも活字として世に出たことのある句を、応募作品に混ぜてはいけません。そんなことが分かったら即失格になります。ずっと応募し続けて、11 回目で久方ぶりに予選を通り候補になりました。その時につけた 50 句全体の題名は「凍る村」であり、次席になりました。題名にした句は、<一筋の流れのほかは凍る村>でした。稲畑汀子先生の選句に敬遠され、苦しみを味わいました。

その次の年の 12 回目の応募の題名は「早苗饗」^{さなぶり}で、ようやく「第 43 回角川俳句賞」の栄に浴することができました。でも作者の心境では、次席の時の句の方が充実していたように思え、小首をかしげたことを忘れはしません。当時 49 歳でした。

「角川俳句賞」に盛んに応募していた当時はまだ私も若くて元気がよく、句作りのときはノートを 2 冊用意して、1 冊は「花守」や「狩」に出す句帖、もう 1 冊は、「角川俳句賞応募作品用句帖」として、2 冊の大学ノートを使い分けていました。良い句ができたと思ったら、まず「角川俳句賞」用のノートに書き、双方の句が重ならないように、細心の注意を払いました。結社誌への投句は自選から漏れたものです。そうすると、「あなたこの頃句が落ちているねえ」という鷹羽狩行先生の新年のお言葉は、私の所為を見抜いておられたということになります。全く汗顔の至りです。

幸運にも「角川俳句賞」を受賞したことにより、やっとプロの出発点に立てたわけであり、ここでゴールインか、次へのステップを望むかで大きく分かります。本物になるにはその後、努力に努力を重ねることしかありません。努力したからといって必ずしも報われるものではありませんが、サボっていれば後退するのみです。他のプロへの登竜門は、句集を出して世に問うとか、評論を書くことなどもあります。

5 句集の刊行

自分の俳句のみを集めて 1 冊の本を刊行する方がいます。これが「句集」と呼ばれています。一般的には 5 年～7 年で 300 句くらいまとめて 1 冊にするのですが、もちろん出さない人も沢山おられます。また一生の記念にと生涯に 1 冊出版し、家宝のようになさる方もいま

す。自分の足跡をまとめるのはよいことですが、かなりお金も必要でありよく考えて、無理のない範囲で上梓^{じょうし}したいものです。日本中では非売品・私家版も含めると1年に500冊以上は出版されると推測できます。

句集には所属の会派により、「俳人協会新人賞」「俳人協会賞」「現代俳句協会新人賞」「現代俳句協会賞」があります。流派を超えて、「読売文学賞」「蛇笏賞」などの、句集への賞もあります。句集には題名があり、作者名も記されています。作者が誰だかわかっているので、情実が若干働く場合があるかも知れず、文学的な公平性からいけば、ややっこしくなることもないとは言い切れません。選考方法は、一次予選二次予選を経て最終組に残ったものの中から、投票か話し合いで受賞作が決まる仕組みが多いようです。何といてもその句集に個性があるか、魅力的であるかどうかが問われます。他人に何と言われようと、堂々と作品をもって世に問うのがよい心掛けです。批判されるのは当たり前なのです。

私は今まで、『雪意』『雪田』『冠雪』『雪形』と、8年に一度くらいのペースで句集を4冊出版しています。運よく第4句集の『雪形』で、54回「俳人協会賞」を受賞できました。『雪形』を出してからもう3年経っています。次の句集を編むために句を毎日作っていますが、なかなか自分で満足できるような作ができません。他人は冷静に見ますから、そう簡単に共鳴を受ける句など出るはずがないのです。9年前に他界した飯田龍太は、「たった一つプロかプロでないか見分ける方法がある。自選をできる人がプロの俳人である」と述べています。

6 句作のスタンス

自分はどんな方向の句を作るのか、少し考えてみましょう。全国的には何々俳句大会などというものが、規模の大小を伴いながら日本中にあり、三句1,000円二組まで可などといった要領で募集されます。流派や年齢に関係なく、楽しむ俳句会です。この俳句大会の合点で上位になると、賞状を貰うとか、トロフィーや盾などが授与されます。一句高得点句にも、それなりの商品が出ます。大会の終了後は質素な酒宴があり、機嫌がよくなったところでお開きとなります。俳句をたしなむ人としては、こういうところで楽しむのも仲間と出会いもあるし、少しはスリルもあり、楽しくて結構なことです。評論家大岡信は、俳句の本質は「宴と孤心」にあるという考え方ですが、こういった大会はどちらかと申しますと、「宴」のパーツですね。その後、家に帰りますと、また新しい作品を作るべく努めなくてははいけません。これは静寂な孤独な作業ですから、「孤心」に該当しましょう。俳句を作る時の営為は常に独自の作業です。せつかく句を作るのですから、先人の作の模倣のようなものではなく、自分らしい句、その人だけが作れる句を作りたいものです。自己模倣もよくないです。常に新しさを求めて句を作ろうとし、精進する姿勢が尊いのです。よその流派のプロの俳人に見られ

でも「これは駄目だ、駄目だ」などと言われないように、その場で剥がれないような句を目指すのですが、決して甘くはなく、時々天から授かったようにおもしろい句に恵まればよしとしなければなりません。

人真似をしない、自分の過去の作品の蒸し返しをしないで、つねに更湯に入るつもりでいきたいですね。

俳壇ではこの 10 年間に、飯田龍太と森澄雄の巨匠が他界しました。その後を埋め切れるだけの大俳人が、残念ながら育てていないのが現状であり、大型な新人の登場が期待されています。俳句の停滞状態から早く抜け出したいものです。



ユーモアを交えた講演に聴き入る 66 名の参加者

7 「写生」とは

正岡子規は 1867 年（慶応 3 年）9 月 17 日生まれ。1902 年（明治 35 年）9 月 19 日没です。彼は江戸時代からの「俳諧の発句」を「俳句」という新しい名にしました。「俳諧」の「発句」を「俳句」という名に替えて、連句から独立させたのです。次に俳句の手法としては、西洋の絵画の「写生」を応用し、取り入れました。彼の友達なかむらふせつの画家、中村不折（芸術院会員）からの意見を参考にしました。子規は埋もれていた江戸時代の俳諧師与謝蕪村を掘り出して、その写生的な手法を高く評価しています。眠っていた蕪村を俳句の世の中に引っ張り出し、脚光を当てたのは子規です。「発句」が「俳句」となり手法の「写生」を唱えてから百年以上経ちました。この手法は衰えることもなく、「写生」の理念は今日に至るまで、俳句の実作の際の王道になっています。なお、子規は脊椎カリエスの為に、弱冠 36 歳で逝去し、とても惜しまれます。なお、絶筆は次の 3 句です。

へちま
<糸瓜咲て痰のつまりし仏かな>
<痰一斗糸瓜の水も間にあはず>
<をとゝひのへちまの水も取らざりき>

子規の死後、俳句は弟子の河東碧梧桐から高浜虚子へと、引き継がれていきます。

高浜虚子（1879年～1954年（明治7年～昭和34年））は、子規の「写生」を発展させ「客観写生」を唱えました。虚子は大正時代になると、「句の表面は簡単な叙景叙事であるが、味わえば味わうほど内部に複雑な光景なり、感情なりが寓ぐうされているような句がよいと思う」と、「ホトトギス」（大正13年3月号）で語っています。これが「客観写生」の理念であり、虚子の造語であります。

また現在の「ホトトギス」同人の深見けん二氏によると、「客観写生とは自然を尊重して、具象的に表現すること。まず観察することが基本ですが、それを繰り返していると対象が自分の心の中に飛び込んできて、心と一つになる。そうになると心が自由になり、最も心が動くようになる」というのが、虚子の言葉であると述べています。

「自然を尊重し」の中には、人間の事も自然に入ると虚子は見っていますが、これが誤解されて、虚子は人間を軽視していると勘違いしている人もまだいるようです。また、虚子自体は主情的な作風であり、「客観写生」は営業的な戦略であるという痛烈な批判もあります。例えば虚子の句で

<春風や闘志いだきて丘に立つ>

<去年今年貫く棒こぞことしの如きもの>

<爛々と昼の星見えきのこ菌生え>

<たとふれば独楽こまのはじける如くなり>

など、いずれも「客観写生」の句ではありません。

また虚子の弟子の

<金剛の露ひとつぶや石の上> かわばたぼうしゃ 川端茅舎

<秋の航いちだいこん一大紺円盤の中> 中村草田男

等の「主観写生」の句も褒めています。どうやら、「客観写生」は俳人がきちんと身に付ける技法であるものの、絶対ではないという認識であったようです。「客観写生」は安易な「主観主義」を戒めた言葉ともいえましょう。

虚子が俳誌等を通じて、弟子たちに「客観写生」を進め究めるように奨励したので、虚子は「客観写生至上主義」であるとの誤解を生みました。またその過程で、同世代の水原秋桜子より高野素十を高く評価したことにより、1931年（昭和6年）秋桜子は主観の復

権を旗印に「ホトトギス」を離脱したのです。それは彼が主宰する俳誌「馬酔木^{あしび}」に「ホトトギス」批判の論文、「自然上の真と文芸上の真に」を發表し「ホトトギス」を離脱しています。これは客観写生が瑣末主義になったという指摘であり、背景に素十と秋桜子との対立もありました。

詠む対象と、表現方法を決める行為に作者が入る以上、100パーセントの客観はありません。焦点を当てようとするときに主観が入ります。ということは、主観が濃いか薄いかの違いに過ぎないことになるのです。「客観写生」は主観を抑制して、事物の根源に迫ろうとする表現方法であるのです。

8 「花鳥諷詠」について

「花鳥諷詠」は、高浜虚子の俳句理論を代表する根本理念です。1928年（昭和3年）に提唱されました。「花鳥」は季題の花鳥風月のことであり、「諷詠」は調子を整えて詠うことです。花鳥諷詠は一般的には自然諷詠の意味になりますが、虚子の場合は、「春夏秋冬四時の移り変りに依っておこる自然界の現象、並びにそれに伴う人事界を諷詠するの謂であります」と人事をも含めていることに着目したいところです。これがないと、人事を軽視することになるからです。

それまで主張していた「客観写生」との関係は明らかにされていません。虚子は終生この主張を繰り返し、変えることはなかったのですが、理論的な展開は示しておりません。虚子は人間もまた造化（自然）の一つとしての、伝統的な考え方に基づくものであると考えたようです。虚子の「花鳥諷詠」は「花鳥風月」を諷詠することであり、人間の営みも含まれている理念なのです。水原秋桜子は「花鳥諷詠」が人事界を含めるというのなら、何も「花鳥諷詠」という必要はなく、それなら「万象諷詠」とすべきだと批判しています。

高浜虚子の俳句理念は「客観写生」と「花鳥諷詠」の間を、行ったり来たりしている俳句人生であったと言えましょう。本人の句も弟子の句も、秀吟は本人が唱えた「客観写生」以外から出ているところに、はなはだシニカルな人間臭い面白さがあるではありませんか。

次に高野素十と私の句を並べてみました。大先生と私ごときものの作品を並べるのは失礼なことですが、作り方の違うところを味わって頂ければそれで結構でございます。

高野素十先生の句

おおほだ いちめん ひ
<大櫓をかへせば裏は一面火>

<甘草の芽のとびとびのひとならび>

せつぺん みそら
<雪片のつれ立ちてくる深空かな>

おおびさし
<方丈の大庇より春の蝶>

あし
<また一人遠くの蘆を刈りはじむ>

若井新一の句

<畦塗るやちちははの顔映るまで>

ゆき ひ ひ
<雪霏々と越後の方位消えにけり>

ゆきおろし
<天よりも青きものなし雪卸>

どろな は
<泥舐めむばかりに這うて田草取>

<農魂の文字の深彫り日の盛>

最後に俳聖芭蕉の金言の幾つかをご紹介します。芭蕉没後、300年以上経ちましたがその教えは衰えるどころか、いよいよ輝きを増すばかりです。これは教えに普遍性がある証しであり、とても凄いことです。どうぞよく味わって頂き、今後の句作の際に役に立ててください。

「付録」芭蕉の金言

- 句は、七、八分にいひつめては、けやけし。五、六分の句はいつまでも聞きあかず
(蕉門俳諧語録)
- 新しきは俳諧の花なり (三冊子)
- 物の見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし (三冊子)
- 松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ (三冊子)

- 句調ととのはずんば舌頭ぜつとうに千転せよ（去来抄）
- 古人の跡を求めず、古人の求めたる所をもとめよいんふたぎ（韻塞）
- 高く心を悟りて、俗に帰るべし（三冊子）
- 発句は、句つよく俳意たしかに作すべし（去来抄）
- 俳諧は、教へてならざる所あり（三冊子 わすれみづ）
- 発句はとり合物なり（篇突）
- 発句は唯、金こがねをうち延べたるやうに作すべし（旅寐論）
- 尿糞の事（去来抄）
- 切字なくては発句のすがたにあらず、付句の体なり（三冊子）
- 虚に居て実をおこなふべし。実に居て、虚にあそぶ事はかたし
ほんちようもんぜん
 （本朝文選 - 支考 陳情ノ表）
- 俳諧（俳句）は老後の楽しみなり（花實集）

これで私の話は終わります。ご清聴ありがとうございました。



会場に俳句関連資料を展示（江南区郷土資料館所蔵）

■ 質疑応答

(司 会)

若井先生、長時間にわたり、熱心にご講演いただきありがとうございました。せっかくの機会ですのでご質問を一つか二つほどお受けしたいと思います。手を挙げてご質問ください。

(若 井)

分かる範囲しか答えられませんので、何かありますか。理屈じゃなくてもいいです。日常の句作のことでどうしたらよいかとか、そういう悩みでもいいです。悩みのない人はまず、いないですよ。仏壇に入るまでみんな悩んでいるのですけれども、俳句上で悩みがあればお答えします。そういう人がいらっしゃれば、本当に何でもいいですよ。作るときでも、俳句を見るときでも、例えば、中原道夫選では、なぜ飛んだり跳ねたりして意外性のあるような句に多く丸がついているのかとか、そういうことでいいです。俳句のことなら何でもいいですよ。

(会 場)

俳句を作るときに季節感を大事にしたいと思うのですけれども、毎年、季節が春、夏、秋、冬と巡ってきますと、自分の思いは大体似たり寄ったりの考えしか浮かばないのでけれども、思いつくことは同じようなことしか思いつかないのです。その辺はどのように考えると良いでしょうか。

(若 井)

そういうものは失礼だけれども、皆さんは人生経験が豊かだから、自分の過去の体験から思い出してきて、俳句にすることも一つの例としては挙げられます。だが、そればかりやっていると、自分のところにCDでも、LPでもあれば、三波春夫の「チャンチキおけさ」や「大利根無情」ばかり聞いて、昔を懐かしんでいるだけでは、同じような句の繰り返しになってしまう可能性があります。そうならないように気を付けたいですね。次に吟行といいまして、一人で行っても、数人で行ってもいいのだけれども、句材を求めて歩く小旅行をお勧めします。3番目には歩いてみることに、歳時記でほかの人はどういうところに目をつけているのかと思って、例句を参考にしてもいいです。でも、そっくり真似をしてはだめですよ。盗作になります。真似をしたり盗んだりして賞をもらっても、後で取り消しになってしまいます。せっかくもらった賞金を、「返せ」などと言われますから、類句・類想にして

は駄目です。しかし、先人はどういうところに目をつけているかというヒントをもらうとか、あるいは近在を自分で歩いてみるのも、句材を見つけられます。新鮮な句材が見つければ、もう半分は成功したといっても過言ではありません。

この辺だったら村松などどうですか、どこかの城跡へ行ってみるとか、何でもいいのですよ。野原に行っても結構、海辺またよし。こうした日常生活や、毎日、家の周りをぐるぐると見ているだけではなく、少し違ったスタンスや角度を変えて自然を眺めてみるのも一案です。自分がまだ嫁に来る前のふるさとは、どうだったかなとか。大体、若い頃の体験は覚えているのです。年寄りになってからの事は、たちまち記憶が薄くなるのですけれども、若いときの事は頭の中に確^{しか}と残っています。それを思い出して、昔はこうだったと言わないで、今のこのように詠めればいいわけです。でも、私は少女でした、などという必要はないですよ。俳句は黙っていれば私のことになりますから、特に「私は」という主語は必要ないのです。足が遅くなっちゃったわと言え、自分のことなのです。あの人の足は遅くなっちゃったわ、となれば他人のことですから、「あの人」のことを言わなければだめですけれども、大体は自分に即しているのが俳句なのです。

(会 場)

「われ」という言葉はいらないですか。

(若 井)

大体不要です。そんなことを言えば、鷹羽先生にお叱りを受けるかな。例えば、くみちのくの星入り氷柱われに呉れよつららなどと鷹羽先生は詠んでおられ、よく知られている名句です。代表句の10句のうちの一つになっています。こういう秀吟は別にして、普通は「われ」はなくても黙っていれば作者のことなのです。本当は私に言わせれば「われ」と言わなくても「われ」が分かるようにして詠めれば、ベストです。鷹羽先生のこの句の場合は、「われ」を言ったほうが最善であると考えて、お作りになった例外的秀吟でありましょう。一般的には「われは」とか、「母は」とか、「父は」などというのは、言わなくてもよいです。「は」ではなくて「父を・母を思い出す」ならいいけれども、例えば「小春日の母は前向きに、腰を伸ばさないうで歩いています」という句を作るとみんな見えて隠すところがありません。説明をしすぎては損をします。客観写生であったとしても、「母は」とか「祖母は」とか「姪は嫁に行きました」などと言わないほうがおもしろいのです。読者が誰の事か想像してくれる余地を残しましょう。省略した部分は、読者に連想してもらうことにします。省略が分かると、確実に腕前が上がります。

(司 会)

それでは、最後、お一人だけご質問がもしございましたら、お手を挙げていただければと思いますが、いかがでしょうか。

(若 井)

明日以降、この会場に私が来ることがあるかどうか分かりませんので、もし何でもよければ、分かる範囲だったらお答えしますし、分からなければ勉強して、図書館の方に回答しておきます。

俳句界を見ると、確かにそれぞれの結社の色というのはあると思います。あると思うけれども、あまりそれにこだわらないことをお勧めします。それから句には「喜怒哀楽」をもろに出さないことが肝要です。見たものを詠むこと。一つの句の中に、いっぱい「もの」を詰め込まない。今までに詠まれたことのありそうな句は、いくら常識的に句の水準が高くてもバツになるから、別の角度から見るなどして、新鮮な句になるよう努力します。女の人を見るとき、前からばかり見ていると駄目です。横から見たり、斜めから見たり。だから、前から見て美人だよとか言わないで、あの人は鼻筋が通っているとか、うなじが白いとか、別の言い方で美しさを知らせましょう。男性で申しますと、アラン・ドロンはハンサムだなんていっても焦点がなく、どのようにハンサムなのか、具体的なものを挙げて頂きたいのです。他の注意点では、形容詞もいっぱい使わない。なるべく少なくする。俳句は名詞だけでも作れるのです。一句の中に動詞をいっぱい入れると散文的になります。散文というのは日常の普通の文ですから、それを防ぐためには韻文にする。一句は一動詞が基本と思ってもらって結構です。俳句の韻文性を保つには、「切字」か「切れ」が欲しい。切字や切れは、一句に一箇所というのが基本です。活用語（用言）をいっぱい使わないこと。動詞を多くすればするほど、文章に近づいてしまいます。俳句は文章から離れること。理屈を言わない。理屈を言うとおもしろくないのです。感動したところをぼんと結論だけ言えば、人は共鳴してくれます。最初のうちは、自分の作った句が一枚の絵になっているかどうか、自分で試してみるのです。絵のように見えれば、必ず丸印がつくか、花丸がつくか定かではないけれども、まず合格なのです。句が一枚の絵のように見えないと、人は光景が見えないから首をひねるわけです。独善でどういうことを言おうとしているかわけが分からないなど、選句のときにパスをされてしまいます。主観ばかり強いと自分はそれでよくても、自画自賛になり、結局意味不明ということになるわけです。現代俳句の第一人者の金子兜太みみたいな作り方はホームランも出るが、危ないところもあるわけです。あまり自分の主観を出しすぎますと危ういのです。人が理解できなければ、その句を句会に出してもなかなか評価されません。再度申し

上げます。自作が一枚の絵のようになっているかどうか。それを自分でチェックしてみましよう。また言葉も類語に入れ替えたりし、声に出して詠んでみるという粘り強さが欲しいです。どうしたら最もリズムがよくなるかが、仕上げになります。同じことを材料にして詠んだとすれば、調べがよい方が丸になります。まあ口で言うのは簡単だけれども、作るほうは大変なのですがね。それは私も十分苦しんで分かっていますから。写生（スケッチ）をして新しい句を作る。最後まで自作を推敲して他人の前に出すようにしましょう。

俳人 若井 新一氏 プロフィール



新潟黒十全なすを収穫する若井さん

1947年新潟県生まれ。大学卒業後企業に就職。会社勤務を続けるとともに実家の農業を継ぐ。その後俳句の道に進み、鷹羽狩行に師事。現在南魚沼市で農業を営みながら、俳句の創作や指導で活躍中。新潟日報ジュニア文芸「俳句」選者、NHK 俳句講座講師、ユークャン俳句添削講師などを務める。

講師著作一覧 (市立図書館所蔵)

せつ い
『雪意』 牧羊社 1989年

せつ でん
『雪田』 本阿弥書店 1996年

かん せつ
『冠雪』 角川書店 2006年 【宗左近俳句大賞受賞】
【角川俳句賞受賞】「さなぶり早苗饗」50句の多数を所収

ゆき がた
『雪形』 KADOKAWA 2014年 【俳人協会賞受賞】

『クイズで楽しく俳句入門』 飯塚書店 2012年

平成28年度 読書週間行事
亀田図書館文化講演会

私の俳句観

講師 若井 新一 氏

五七五の世界に詠まれた暮らしや自然のすがた。新潟の風土に根差し農業を営みながら、句作を続けていらした若井新一さんをく俳句の里・亀田>にお迎えし、俳句作りのさまざまなエピソードや作品鑑賞、俳句作りのポイントについてうかがいます。

日頃から俳句に親しむ皆さん、これから作ってみたい皆さん、時には俳句の世界に触れて楽しみたいという皆さん、どうぞお気軽にご参加ください！

- ◆ 日時 平成28年11月23日（水・祝）
午後2時～4時（受付 午後1時30分 開始）
- ◆ 会場 江南区文化会館（亀田地区公民館 多目的ルーム）
新潟市江南区茅野山3丁目1-14 ※裏面の案内図をご覧ください。
- ◆ 内容 講演会「私の俳句観」 ※関連資料展示
講師 若井 新一 氏（俳人・南魚沼市在住。詳細は裏面）
- ◆ 対象・定員 一般 70名（先着順）
- ◆ 参加費 無料
- ◆ 申し込み 市役所コールセンター 電話：025-243-4894
10月25日（火）受付開始 午前8時～午後9時受付
- ◆ 主催 亀田図書館（毎週金曜日・毎月第1水曜日は休館日）
電話：025-382-4696 FAX：025-381-8003
E-mail：kameda.cl@city.niigata.lg.jp
- ◆ 協力 亀田俳句会、亀田地区公民館、江南区郷土資料館

平成 28 年度 新潟市立亀田図書館 文化講演会
「私の俳句観」 講演会記録集

平成 29 年 3 月 発行

監修者 若井 新一 (俳人)

編集・発行 新潟市立亀田図書館
新潟市江南区茅野山 3 丁目 1 番 1 4 号
電話 025-382-4696 F A X 025-381-8003
メールアドレス kameda.cl@city.niigata.lg.jp

「新潟市の図書館」ホームページアドレス <http://www.niigatacitylib.jp>